

「透明な批評」で読むアガサ・クリステイ

—ミス・マープルの履歴書(1) 年齢

坂 田 薫 子

序—「透明な批評」とは何か

文学批評理論に関する入門書である廣野由美子の『批評理論入門』(2005年)の第2部第13章にも分かりやすく解説されているが、「透明な批評(transparent criticism)」を簡単にまとめると、次のようになる。アントニー・デイヴィッド・ナトール(Anthony David Nuttall)はウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare)についての研究書『ニュー・ミメシス』(*A New Mimesis*, 1983年)で批評の種類を「不透明な(Opaque)」(ナトール 80頁)批評と「透明な(Transparent)」(ナトール 80頁)批評に分類する。前者はテキストを客体としてとらえ、テキストの外側に立って分析する方法であり、後者はテキストの内側に入り込み、あたかも作品内の虚構の出来事や登場人物が現実のものであるかのように論じる方法である(ナトール 80~81頁)。ナトールは『ハムレット』(*Hamlet*, 1601年ごろ)、『リア王』(*King Lear*, 1606年)、『マクベス』(*Macbeth*, 1606年)、そしてヘンリー・ジェイムズ(Henry James)の『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*, 1881年)などを例に両者の違いを解説し、そして廣野は「透明な批評」を用いて、『フランケンシュタイン』(*Frankenstein*, 1818年)の「アーネスト・フランケンシュタインはどこへ行ったのか?」の答えを探る。

そこで、論文『「透明な批評」で読むアガサ・クリステイ—ミス・マープルの履歴書』では、素人探偵ミス・マープル(Jane Marple)が活躍する

アガサ・クリスティ (Agatha Christie) のミステリー小説を対象に、「不透明な批評」を用いて作家クリスティのミステリーの手法を分析するのではなく、「透明な批評」を用いてミス・マーブルをあたかも実在の人物として扱い、彼女の身辺調査を行ってみようと思う。まず本論文「(1) 年齢」では、ミス・マーブルが一体何歳なのかを解説してみる。

1. 作品の舞台の年代

最初に、長編、短編を問わず、ミス・マーブルが登場する全作品を、その出版年代順ではなく、推測可能な限り、語りの現在の時代順になるように並べ替え、それぞれの作品の舞台となっている年代を割り出してみる。その際、セント・メアリ・ミード村 (St. Mary Mead) とその周辺の土地開発の様子については、必ずしも年号を特定できるものではないため、触れるのは『鏡は横にひび割れて』 (*The Mirror Crack'd from Side to Side*, 1962年) にとどめ、詳細を論じるのは別の機会に譲ることにしたい。なお、クリスティ作品はイギリスとアメリカでの出版の時期が異なることが多いが、原則としてイギリスでの出版年を示し、アメリカでの出版の方が早い場合のみ両方の年を示し、短編集収録の短編については出版の月までを、そして比較が必要な場合は日にちまで示すこととする。

1.1. 1920年代末——『13の謎』 (*The Thirteen Problems*, 1932年)

短編集『13の謎』は、最初の長編『牧師館の殺人』 (*The Murder at the Vicarage*, 1930年10月) よりも前の1927年12月から1930年5月の間に発表され、『牧師館の殺人』での事件が起こるよりも前に開かれた2つの集まりを描いた12編の短編と、もうひとつの短編「溺死」 (“Death by Drowning”, 1931年11月) の合計13編の短編からなっている。

(1) ミス・マーブル宅での「火曜クラブ」

最初の6編は、冒頭の短編「火曜クラブ」 (“The Tuesday Night Club”、

1927年12月)で説明されているように、セント・メアリ・ミード村にあるミス・マーブルの家に毎週火曜日に、ミス・マーブル本人、彼女の甥で新進気鋭の作家のレイモンド・ウエスト (Raymond West)、彼の恋人で芸術家のジョイス・レンプリエール (Joyce Lemprière)、元スコットランドヤード警視総監のサー・ヘンリー・クリザリング (Sir Henry Clithering)、セント・メアリ・ミード村のペンダー牧師 (Dr. Pender)、ミス・マーブルの事務弁護士ペサリック氏 (Mr. Petherick) の6人が集まって、毎回誰かがひとつ話をする「火曜クラブ」での6つの物語である¹。冒頭にはミス・マーブルとレイモンド以外のメンバーは「[ミス・マーブル]の甥の招待客」(3頁)であると記されているが、おそらく、ジョイスとサー・ヘンリーを(ロンドンから)招待したのはレイモンドで、地元のペンダー牧師とペサリック氏を招待したのはミス・マーブルであろう。

「火曜クラブ」の初回の集まりが短編「火曜クラブ」の出版年月と同じだとすれば、最初の6つの物語は1927年12月のどこかの週から6週間後までの、つまり1928年1月か2月までの設定と考えられるものの、毎週ひとつずつ話しているのではなく、最初の会で話された6つの物語を6つの章にしているようにも読める。その理由はいくつかあるが、そのうちの2つを挙げてみると、まず、もしもサー・ヘンリーが6回もセント・メアリ・ミード村(のミス・マーブルの家)を訪問しているのなら、近隣に住む旧友のバントリー大佐夫妻 (Colonel Arthur Bantley and Dolly Bantley) の屋敷(まだこの時点では夫妻のカントリーハウスの名称は明らかにされておらず、ゴシントン・ホール (Gossington Hall) という名称が初登場するのは『書斎の死体』(*The Body in the Library*, 1942年)である)に立ち寄らない、あるいは立ち寄る時間がなかったとしても、バントリー夫妻に連絡さえしないというのは不自然である。事実彼は短編「青いゼラニウム」(“The Blue Geranium”, 1929年12月)で初めてバントリー夫妻に自分がミス・マーブルと知り合いになったことを告げている。

もうひとつの理由は、セクション「1. 3. 2.」でもう少し詳しく論じる

が、短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』(*Miss Marple's Final Cases*, 1979年)に収められている短編「ミス・マーブルの思い出話」(“Miss Marple Tells a Story”, 1934年ラジオ放送、1935年雑誌掲載)の中で、ミス・マーブルの家で「火曜クラブ」が開かれた何年か後に、ミス・マーブルがレイモンドに向かってする「ベサリック氏のことを覚えていますか?」(98頁)という質問である。上述のように、地元のベサリック氏を招待したのはミス・マーブルだったとしても、「火曜クラブ」が毎週火曜日に開かれ、6回(以上)集まったのならば、レイモンドが数年後にメンバーのことを忘れてしまうはずはない。そう考えると、「火曜クラブ」はある火曜日の晩に6人全員が話し終え、その一回で終わったと見なした方が自然ではないだろうか²。

さらに、一回の会で6つの物語がすべて語られた(一晩の出来事だった)にしろ、6回「火曜クラブ」の集まりがあったにしろ、「火曜クラブ」は構成員の6人の話が一巡して解散になったようである。なぜならば、短編「溺死」でサー・ヘンリーは、ミス・マーブルは「12個の事件」(227頁)を解き明かしたと言っているのです。彼女の家での6つの話と、次に説明するバントリー夫妻の屋敷での6つの話でミス・マーブルの推理の披露が終わったことが分かるからである。

(2) バントリー夫妻の屋敷での晩餐会

次の6編は、「火曜クラブ」の集まり(上述の6つの話が語られた集まり以降に毎週「火曜クラブ」が開催されていたのかは不明であるが、おそらく、この6回の集まり)の翌年(短編「青いゼラニウム」の冒頭に、サー・ヘンリーが「火曜クラブ」に参加するためにセント・メアリ・ミード村を訪問したのは「去年」(100、101頁)だったと記されている)にバントリー夫妻の屋敷で開かれた晩餐会が舞台となっている。そこに集まった6人(主催者であるバントリー夫妻、彼らの友人であるサー・ヘンリー、女優ジェイン・ヘリア(Jane Helier)、セント・メアリ・ミード村のロイド医師(Dr.

Lloyd)、ミス・マープル)がひとつずつ話をする。このころのバントリー夫人はミス・マープルのことを知ってはいても、あまり付き合いはなく、サー・ヘンリーの推薦で彼女を晩餐会に呼ぶことになる。二人は『書斎の死体』以降はお互いをドリー、ジェインとファーストネームで呼び合う仲になっているが、この晩餐会ではバントリー夫人、ミス・マープルと苗字で呼んでいる。

こちらの6つの話は一回の晩餐会の席ですべて話し終わる。そのことは、4つ目の話となる「クリスマスの悲劇」(“A Christmas Tragedy”、1930年1月)でサー・ヘンリーが「今晚、これまで3つの話をしてきました」(163頁)と言っているところからもうかがえる。「火曜クラブ」が1927年12月から1928年の1月か2月までだとするならば、その翌年と言うことは、1929年の設定で、晩餐会での最初の話となる「青いゼラニウム」の出版年月と同じになる³。

1.2. 1930年代初頭

1.2.1. 『牧師館の殺人』(The Murder at the Vicarage、1930年)

『牧師館の殺人』以降のミス・マープル作品に登場するセント・メアリ・ミード村の開業医はロイド医師ではなくヘイドック医師(Dr. Haydock)で、教区牧師はペンダー牧師ではなくクレメント牧師(Leonard Clement)であることから、『牧師館の殺人』の舞台は短編集『13の謎』のバントリー夫妻の屋敷での晩餐会より後となり、晩餐会開催と同年となる1929年か、『牧師館の殺人』の出版年である1930年と考えられる。しかし、兵役を終えて帰国した兵士たちの精神衛生への第一次世界大戦の影響の大きさ、特にシェルショックについての描写がある点や、登場人物たちの「このあたりは女ばかり」(64頁)や「このあたりに独身男性は一人もいない」(192頁)という発言が暗示する「余った女たち(superfluous women)」の問題から考えると、1930年前後よりも、第一次世界大戦直後となる1920年代前

半の設定と見なす方が適当かもしれない。

ミス・マーブルとともに今後セント・メアリ・ミード村のオールドミスのトリオを形成するミス・ハートネル (Miss Amanda Hartnell)、ミス・ウェザビー (Miss Caroline Wetherby)、そしてこのトリオ以上に詮索好きな未亡人プライス＝リドリー夫人 (Mrs. Martha Price Ridley) が初登場する。上述のように、村の医者とは短編集『13の謎』に登場していた「ここ5年間、セント・メアリ・ミード村の様々な病気を治してきた年配の独身の医者」(120頁)であったロイド医師から、警察医も担当しているヘイドック医師に変わっている。また、教区牧師は短編集『13の謎』に登場していた年老いたペンダー牧師からクレメント牧師に変わっている。モダニズムの「詩人としてかなり名を成した」(195頁)甥のレイモンドがミス・マーブルの家に泊りに来る。本事件の警察の担当者は今後も数回登場することになる、セント・メアリ・ミード村が所属する州(本作ではダウンシャー(Downshire)となっているが、『書斎の死体』からはラドフォードシャー(Radfordshire)となっている)の地方警察の警察本部長(Chief Constable)メルチェット大佐(Colonel Melchett)とスラック警部(Inspector Slack)である。

1.2.2. 「溺死」(“Death by Drowning”、1931年11月)

短編集『13の謎』の最後に収められている。『13の謎』でバントリー夫妻の屋敷で晩餐会が催されたときより後の設定で、サー・ヘンリーが再びバントリー夫妻の屋敷を訪問している。メルチェット大佐が登場するが、ミス・マーブルとの直接の絡みはない。1942年出版の『書斎の死体』で、サー・ヘンリーは自分が初めてメルチェット大佐に会ったのはこの溺死事件であったと述べていることと、メルチェット大佐はミス・マーブルが事件の急所を突いたのは一度きりではないと言っていること、さらには『牧師館の殺人』で語り手のクレメント牧師が「セント・メアリ・ミード村では少なくともここ15年間殺人事件は一度もなかった」(168頁)と述べて

いることから、この溺死事件は『牧師館の殺人』よりも後で、『書齋の死体』よりも前であることが分かる。そうだとすると、この作品は1929年から出版年の1931年までの間の設定と考えられる。ヘイドック医師への言及がある。

1.3. 1930年代

1.3.1. 『書齋の死体』 (*The Body in the Library*, 1942年)

『書齋の死体』は2つの年代設定が可能である。登場人物たちの成長の具合を考慮すると、『牧師館の殺人』の最終章で妊娠していることが記されていたグリゼルダ・クレメント (Griselda Clement) の息子デイヴィッド (David) が「ハイハイ」をしているので、『牧師館の殺人』の1年から1年半ほど後の1930年ごろから1932年ごろの事件となる。他方、作品で言及される史実を考慮すると、ヴィヴィアン・リー (Vivien Leigh) が映画『風と共に去りぬ』 (*Gone with the Wind*, 1939年) の主役に抜擢された (1939年1月) 話が出てくるため、1939年以降の設定となる。また、『予告殺人』 (*A Murder Is Announced*, 1950年) に第二次世界大戦が勃発したためにスイスからイングランドに戻れなくなった姉妹の様子が描かれていることから、クリステイがそうした史実に注意を払っていることを重要視すると、『書齋の死体』では海岸沿いのリゾート地が閉じられていないので、この作品は英国空中戦 (バトル・オブ・ブリテン) 勃発の1940年より前の設定となるはずである。こうした点を考慮に入れた場合は、『書齋の死体』は1939年の設定と思われる。

バントリー家の書齋で死体が見つかった当日についての「セント・メアリ・ミード村はその朝、もう長い間経験したことがないほど興奮していた」 (40頁) という描写は、『書齋の死体』は『牧師館の殺人』から大分年月が経っている印象を与え、この描写を有効と見なすと、『書齋の死体』は『牧師館の殺人』から10年近く経っているとするとする1939年説の方が適当に思わ

れる。他方、もしも10年近く経っているのなら、『牧師館の殺人』で45歳だったクレメント牧師は55歳前後になっているはずなのだが、本作でもまだ「中年 (middle-aged)」(43頁)と描写されている。『牧師館の殺人』で50歳前後⁴のミス・ハートネルが「初老の (elderly)」(141頁)と描写されていたことを考えると整合性がない。また、『牧師館の殺人』で25歳だったグリゼルダは35歳前後になっているはずなのだが、未だに「若い (young)」(182頁)と描写されている。クレメント夫妻だけに注目すると、『書体の死体』は1930年初頭の設定と考える方が適当と思われる。おそらく、年月は10年近く流れているのに、登場人物たちは1歳か2歳しか年を取っていないのかもしれない。

バントリー夫妻、ヘイドック医師、サー・ヘンリー、メルチュット大佐、スラック警部、ミス・ハートネル、ミス・ウェザビー、プライス＝リドリー夫人、クレメント夫妻が登場する。

1.3.2. 「ミス・マーブルの思い出話」(“Miss Marple Tells a Story”, 1934年5月ラジオ放送、1935年5月雑誌掲載)

現在は短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』に収められている。「火曜クラブ」でミス・マーブルの推理力に感銘を受けた弁護士ペサリック氏が、殺人容疑を受けた顧客のローズ氏 (Mr. Rhodes) の無実を証明するため、相談に来たときの話を、ミス・マーブルがレイモンドとジョアン (Joan) (この短編では二人の関係は明らかにされていないが、1940年ごろ執筆された『スリーピング・マダー』(*Sleeping Murder*, 1976年)でレイモンドの妻として登場する⁵) に一人称で語る。ミス・マーブルの語りの現在より2年前にペサリック氏は亡くなっている。先ほども触れたように、ミス・マーブルは「火曜クラブ」のメンバーであるレイモンドに向かって「ペサリック氏のことを覚えていますか？」(98頁)と質問しているので、「火曜クラブ」から少し年月が経っていると仮定すると、1927年から1928年にかけて開かれた「火曜クラブ」のすぐ後にペサリック氏はローズ氏の殺人

容疑を晴らすためにミス・マーブルを訪れ、その後1932年ごろ亡くなり、この物語の語りの現在はラジオ放送時の1934年ごろかと思われる。

1.3.3. 「昔ながらの殺人事件」(“Tape-Measure Murder”、アメリカ版1941年11月16日、イギリス版1942年2月)

現在は短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』に収められている。ミス・マーブルの姪孫(「てっそん」、甥姪の息子)が3歳であると記されている。次回の論文「(2)人物相関図」で詳しく考察する予定だが、ミス・マーブルの甥はレイモンド一人ではないので断定はできないものの、この姪孫がレイモンドの息子だとすると、『パディントン発4時50分』(4.50 from Paddington、1957年)に次男デイヴィッド(David)が登場することから、この3歳の姪孫は彼の長男と考えられる。レイモンドとジョアンが「火曜クラブ」の後ですぐに結婚し、子どもが生まれたと仮定すると、設定は1935年前後と思われる。ミス・ハートネルとメルチェット大佐とスラック警部が登場する。

1.3.4. 「申し分のないメイド」(“The Case of the Perfect Maid”、1942年4月)

現在は短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』に収められている。『書斎の死体』で「ハイハイ」をしていたクレメント夫妻の息子デイヴィッドがここでは鉛をなめているので、『書斎の死体』から数年経っている。『書斎の死体』を1930年から1932年の設定と見なせば、この短編の設定は1930年代前半となる。ただし、上述のように、史実を重んじ、『書斎の死体』を1939年設定と見なすのなら、1940年代初頭となる。ミス・ハートネル、ミス・ウェザビー、メルチェット大佐、スラック警部が登場する。ヘイドック医師、プライス＝リドリー夫人、グリゼルダ・クレメントへの言及がある。

1.3.5. 「奇妙な冗談」 (“Strange Jest”、アメリカ版 1941 年 11 月 2 日、イギリス版 1944 年 7 月)

現在は短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』に収められている。短編集『13の謎』のバントリー夫妻の屋敷での晩餐会でミス・マーブルの推理力に感銘を受けた女優ジェイン・ヘリアが、困っている知り合いに彼女を紹介する。ミス・マーブルの姪孫ライオネル (Lionel) の趣味が切手収集であるという話が出てくる。上述のように、ミス・マーブルの甥はレイモンド一人ではないので断定はできないものの、ライオネルが短編「昔ながらの殺人事件」でも触れられていたレイモンドの長男だとすると、ライオネルが切手オークションの話をしているので、3歳の幼児であったと記されている「昔ながらの殺人事件」よりも随分年長になっており、設定は1930年代後半であろう。

1.3.6. 「管理人事件」 (“The Case of the Caretaker”、1942 年 1 月)

現在は短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』に収められている。インフルエンザから回復したばかりでまだ寝込んでいるミス・マーブルを元気づけるため、ヘイドック医師が近隣で起こった殺人事件を手記にして推理を楽しませる。この短編の語りの現在がいつであるのかは不明だが、戦時中を思わせる描写はないため、第二次世界大戦より前の1930年代後半かと思われる。ヘイドック医師の手記は事件がセント・メアリ・ミード村、あるいはその近隣で起こったかのように記されているが、寝込んでいるとはいえ詮索好きのミス・マーブルがセント・メアリ・ミード村の近隣で起き、村でも噂になっている事件についてまったく知らないというのはあまりに不自然である。ヘイドック医師がかつて開業医をしていた別の市町村で起こった過去の出来事と考えた方がよさそうである。

1.4. 1940年代初頭

1.4.1. 『動く指』(The Moving Finger、アメリカ版 1942年、イギリス版 1943年)

高い税を支払うため、家を貸すことを余儀なくされる高齢者の様子が描かれており、戦争の影響が暗示されているものの、はっきりとした年代の設定はない。ポワロ (Hercule Poirot) 作品の『スタイルズ荘の怪事件』(The Mysterious Affair at Styles、1921年)でヘイスティングス大尉 (Captain Arthur Hastings) が第一次世界大戦で負傷し、スタイルズ荘 (Styles Court) を訪れるのと同じように、一人称の語り手ジェリー・バートン (Jerry Burton) が第二次世界大戦の英国空中戦 (バトル・オブ・ブリテン) で負傷し、リムストック (Lymstock) というマーケットタウンに静養に来たとすると、1940年の設定と考えられる。実際にジェリーが何度も見る混乱した夢の内容は彼に戦争体験があることを暗示している。また、グリフィス医師 (Owen Griffith) が「[リムストック町]で結婚や婚約をしていない唯一の男性」(43頁)であるのは、舞台設定が戦時中で、健康な男性たちが皆戦場に駆り出されていることを示唆しているのかもしれない。ただし、事件解決後にミス・バートン (Emily Barton) とミス・グリフィス (Aimée Griffith) がクルーズ旅行に出かける点を考慮すると戦争中とは考えにくくなる。あるいはこれは、クリステイが物語の最後を戦争が終結している平和な未来に設定したのかもしれない。他方で、次のセクション「1.4.2.」で述べるように、『動く指』は『スリーピング・マーダー』より前の出来事であることが明記されているので、『スリーピング・マーダー』が1936年から39年の間の設定ならば、当然『牧師館の殺人』と『書斎の死体』よりも後の出来事と仮定した場合、この作品の設定は1930年代と考えた方がよいことになる。

1.4.2. 『スリーピング・マードー』 (*Sleeping Murder*、出版は1976年だが、執筆は1940年ごろ(第二次世界大戦中))

ジョージ6世の写真と、エリザベス王女とマーガレット王女の写真が飾られているので、ジョージ6世の在位期間となる1936年から52年間の設定である。また、エリザベス王女の結婚式の写真が飾られていないので、1947年よりも前ではないかと思われる。ウエスト夫妻の会話の中に、以前セント・メアリ・ミード村で事件が起こり、そのときレイモンドがそこに滞在中で、その事件でミス・マーブルが有名になったという描写があるので、この物語は『牧師館の殺人』より後の話である。また、プライマー警部補(Detective Inspector Primer)は、ミス・マーブルは3つの州の警察本部長(Chief Constables)に名が知られていると言い、『牧師館の殺人』と『動く指』について触れたうえで、『牧師館の殺人』のことを随分前の事件と言っている。すると、この事件は『牧師館の殺人』、『書斎の死体』、『動く指』より後の出来事となる。さらに、船旅が止められておらず、海岸の保養地が閉じられていないので、ジョージ6世が即位した1936年から、英国空中戦(バトル・オブ・ブリテン)勃発前の1939年間の設定か、あるいは、クリスティが原稿を執筆した後、出版年までに校正を行ったとすると、第二次世界大戦後の1945年から、ジョージ6世崩御の1952年間の設定と考えられる。作品内で言及される世界大戦が第一次世界大戦なので、前者の1936年から39年の可能性の方が高いだろう。

ウエスト夫妻、ヘイドック医師、バントリー夫妻が登場する。「牧師の妻」(41頁)は出てくるが、グリゼルダであるとは明記されていない。「[セント・メアリ・ミード]村のゴシップ好きの3人」(40頁)という表記が示すのはおそらくミス・ハートネル、ミス・ウェザビー、プライス＝リドリー夫人のことであろう。プライマー警部補が言及するメルローズ大佐(Colonel Melrose)は内容から言って、メルチェット大佐の誤りかと思われる。

1.5. 1940年代後半——『予告殺人』(A Murder Is Announced, 1950年)

史実に基づくと、冒頭の新聞記事から、『予告殺人』の事件は国連(安全保障理事会)で決議がなされた1948年10月29日金曜日に関起っていると推察される。1927年か1928年から12年程度経っているという描写と、1922年生まれ的人物が25歳から26歳になっているという描写も、1948年前後の設定を裏付ける。『予告殺人』は第二次世界大戦の影響が顕著な作品で、食糧不足、配給、闇市、家庭菜園での自家栽培、違法な物々交換、燃料不足、物価の上昇、高い税、低い利息、送金の困難さ、労働者不足、召使い不足、住み込みの召使いの激減、住み込みの召使いとして働く難民、日雇い(通い)の召使い、荒れたままの地所、物騒な世の中、犯罪件数の増加(平穏だったセント・メアリ・ミード村でも銀行強盗があった)、脱走兵などへの言及があちこちに見られる。ミス・マープルが嘆くように、以前はよそから誰かが引っ越してくる場合は紹介状を持って来たり、誰かの知り合いだったりしたのだが、やって来た人の正体を確かめる術がない。クリスティ作品は、この『予告殺人』を含め、第二次世界大戦以降の世界を描いた作品になると、戦後の混乱時の「なりすまし」が事件と直接かかわっているものが多くなる。一例を挙げれば、ポワロ作品の『満潮に乗って』(Taken at the Flood, 1948年)がこれに当てはまる。

サー・ヘンリー、そしてサー・ヘンリーが名付け親となっているクラドック警部補(Detective-Inspector Dermot Eric Craddock of the Middlesex Police、この作品ではまだスコットランドヤードではなく、地方警察勤め)と、ミス・マープルが名付け親となっているダイアナ・ハーモン(Diana Harmon、通称バンチ(Bunch))が登場する。ウエスト夫妻への言及がある。

1.6. 1950年代

1.6.1. 「教会で死んだ男」(“Sanctuary”、アメリカ版 1954年9月、イギリス版 1954年10月)

現在は短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』に収められている。『予告殺人』と同じチップング・クレグホーン村 (Chipping Cleghorn) が舞台となっており、バンチが再登場する。チップング・クレグホーン村のエイベル巡査 (Constable Abel) がミス・マーブルのことを「数年前にここに来ていた人」(20頁)と述べ、『予告殺人』で出会ったクラドック警部補がバンチに向かって「またチップング・クレグホーン村で犯罪ですね」(21頁)と述べていることから、『予告殺人』よりも後の事件で1950年代初頭の設定と思われる。ウエスト夫妻への言及がある。

1.6.2. 『魔術の殺人』(*They Do It With Mirrors*, 1952年)

セクション「2.1.4.」で詳しく述べるが、ミス・マーブルが最後に友人キャリー・ルイズ・セロコールド (Carrie Louise Serrocold) に会ったのは1928年で、その後25年会っていないと述べているので、出版年と同じ1952年の設定と考えられる。カリ警部補 (Inspector Curry) がロシア人の立ち位置を20世紀初期のドイツ人と比較し、嫌悪感をあらわにする箇所は、この作品の舞台設定が冷戦期に入っていることを示している。また、クリスティの伝記を著したローラ・トンプソン (Laura Thompson) はこの作品には、慈善事業が人の生き方を変える力を持っていると考えた第二次世界大戦後の人びとの確信が描かれていると指摘し(66頁)、クリスティ作品の研究者ジェイムズ・ゼンボイ (James Zembo) はこの作品では、人格形成には環境が大きな役割を果たすという1950年代初頭に流行した考え方に基づいた矯正施設が舞台となっていると指摘している(266~67、270頁)。レイモンドへの言及がある。

1.6.3. 『ポケットにライ麦を』 (*A Pocket Full of Rye*, 1953 年)

1948年に設立された国民保健サービスへの言及がある点から、物語の現在は1948年から作品が出版された1953年の間の設定であると思われる。サー・ヘンリーへの言及がある。

1.6.4. 「グリーンショウ氏の阿房宮」 (“*Greenshaw’s Folly*”, 1956年12月)

現在は短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』に収められている。1860年から70年に建てられたカントリーハウスの書斎の本が90年前に備え付けられたものと描写されているので、1950年代が舞台設定となる。ウエスト夫妻が登場する。レイモンドは中年になっている。

1.6.5. 『パディントン発4時50分』 (*4.50 from Paddington*, 1957年)

史実を参考にするとエリザベス女王の時代に入っていることから、1952年以降の設定であることが分かり、また、ミス・マーブルが死刑が廃止されたことは残念だと述べていることから、死刑の適用が限定された1957年以降の設定であることも分かる。物語の現在は作品出版年の1957年なのであろう。また、登場人物たちの成長の具合を考慮すると、クレメント夫妻の息子レナード (Leonard) はまだ「少年」(25頁)で、寄宿学校に通っているのだろうか、ちょうどクリスマス・シーズンで帰省している。そしてグリゼルダについて、「成人した息子」(27頁)が一人いるとは思えないほど若々しいと描写されているので、『書斎の死体』と短編「申し分のないメイド」に出てくるデイヴィッドがこの「成人した」長男であり⁶、レナードは次男と考えられる。そしてウエスト夫妻の次男デイヴィッドは現在イギリス国鉄で働いており、捜査に協力するほど大きくなっている。これらの点から、本作品は『書斎の死体』から20年以上経っていると思われる。スコットランドヤードに異動したクラドック警部補が登場し、レイモンド、ヘイドック医師、サー・ヘンリー、『予告殺人』への言及がある。

1.7. 1960年代

1.7.1. 『鏡は横にひび割れて』 (*The Mirror Crack'd from Side to Side*, 1962年)

時は流れ、バントリー大佐、ミス・ウェザビーがすでに亡くなっている。グリゼルダはセント・メアリ・ミード村を去り、今ではミス・マーブルとクリスマスカードのやり取りをするだけで、現在、別の人物が教区牧師になっているので、おそらくクレメント牧師も亡くなったのだろう。ハイ・ストリートの様相も一変している。魚屋にはショーウィンドウが設置され、冷凍された魚が陳列されている。以前籠屋があったところには近代的なスーパーマーケットが建ち、ミス・マーブルはレジに並んだり、見慣れない商品を見たりして、困惑している。『復讐の女神』 (*Nemesis*, 1971年) でロンドンから25マイルほどのところにあることが明らかにされているセント・メアリ・ミード村は、ミス・マーブルがうろ覚えで『『大計画』だったか、何かそういう名前だった』 (6頁) と述べている「大ロンドン計画」の「外郭地帯」にあたり、明らかにその影響を受けていることが、農業経営者ジャイルズ (Farmer Giles) がかつて放牧していた牧草地が「住宅団地」 (Development、セミ・デタッチト・ハウスが立ち並ぶ新興住宅地) に変わり、近隣の都市に通勤する人びとが住むようになっていく点に読み取ることができる。新興住宅地に住む新人類の若者たちはレコード・プレイヤーで音楽を聴き、電気掃除機をかける。住み込みのメイドの時代は終わり、「パーラーメイド」という言葉も死語となる。「ラウンジ」という表現が「ドロ잉・ルーム」に取って代わる。1950年代末と1960年代初頭の「テディ・ボーイ (テッド)」 (いわゆる不良少年) への言及がある。

ミス・ハートネル、ヘイドック医師、警部補から警部 (Chief-Inspector) に出世したクラドック警部、未亡人となったバントリー夫人が登場する。また、『パディントン発4時50分』に登場したセント・メアリ・ミード村のコーニッシュ巡査部長 (Sergeant Frank Cornish) が警部補 (Detective-

Inspector) に昇進している。『13の謎』、『牧師館の殺人』、『書斎の死体』、サー・ヘンリー、レイモンドへの言及がある。

1.7.2. 『カリブ海の秘密』 (*A Caribbean Mystery*, 1964年)

冒頭に、ミス・マープルは前年の冬に肺炎にかかったため、レイモンドの計らいで静養を目的に西インド諸島のリゾート地を訪れていると記されているが、「前年」というのは物語の現在から見たものではなく、小説が出版された1964年11月から見たもののようで、1963年の年末か1964年の初頭の設定と思われる。しかし、前作の『鏡は横にひび割れて』の舞台が8月なので、肺炎にかかったのはそのすぐ後の冬のように思われる一方で、レイモンドが作家仲間にミス・マープルの自宅のハウスシットを頼み、『鏡は横にひび割れて』の最後で家をシェアすることになったチェリー・ベイカー (Cherry Baker) 夫妻が登場しないため、設定の年代は断定できない。エステル・ウォルターズ (Esther Walters) が死刑廃止への反対意見を表明する場面は、恋敵への悪意も感じられるものの、1960年代の死刑廃止運動の高まりの影響かと思われる⁷。ウエスト夫妻が回想の中に登場する。サー・ヘンリーとクラドック警部への言及がある。

1.7.3. 『バートラム・ホテルにて』 (*At Bertram's Hotel*, 1965年)

ミス・マープルがかつてバートラム・ホテルを訪問したのは50年から60年前の1909年のことだと記されているので、物語の現在は1959年から1969年 (出版年よりも前だとすると1965年) の間となる。さらに、西インド諸島への旅行への言及があるので、『バートラム・ホテルにて』は『カリブ海の秘密』の後の出来事であるうえに、11月から12月にかけての事件となっていることから、1964年の設定と思われる。ただし、『カリブ海の秘密』同様、チェリー・ベイカー夫妻は登場しない。ウエスト夫妻が回想の中に登場する。ジョアン・ウエストはそろそろ50歳になろうとしている。

この作品はミス・マーブル作品では珍しく、ロンドンが舞台であるためか、年代の指標となる記述が多く見られる。史実と照らし合わせることができ言及を例として2つ挙げると、まず、1962年にレコードデビューし、1970年に解散したビートルズへの言及がある。そして、1962年に導入され、1967年まで用いられた押しボタン式の横断歩道、パンダ・クロッシング (Panda crossing) への言及がある⁸。こうした言及から、この物語の設定は1962年から出版時の1965年の間と考えられ、上述の1964年設定説を有力視させる。1962年から1965年の間の設定であるため、ミス・マーブルは第6章で、1984年に閉店する百貨店ロビンソン・アンド・クリーヴァー (Robinson & Cleaver's) や、1973年に百貨店グループ、ハウス・オブ・フレイザーに買収されるアーミー・アンド・ネイヴィー・ストア (The Army & Navy Stores) を再訪することは叶うものの、第12章では、毛皮を専門とした高級服メーカー、ブラッドレーズ (Bradley's、正式名称 Bradleys Chepstow Place Ltd.) を探した際は、ブラッドレー家はクリーニング業に特化し、1952年に建物を売却してしまっていたため、見付けることができない。また、ペニーファーザー牧師 (Canon Pennyfather) とエルヴィラ・ブレイク (Elvira Blake) は1974年1月1日に業務を終えるケンジントンのエア・ターミナルを利用している。ちなみにクリスティ研究者のゼンボイは、第8章の列車強盗のモデルは1963年8月に実際にあった列車強盗であると指摘している (353～54頁)。

1.7.4. 『復讐の女神』 (Nemesis、1971年)

他のミス・マーブル作品との関連を考慮すると、『カリブ海の秘密』から約1年半経っていることになっているので、1960年代中葉の設定のように思われる。しかし、史実と照らし合わせると、オールド・マナー・ハウス (The Old Manor House) の元メイドのジャネット (Janet) が今では死刑が行われなくなったことを嘆く場面があるので、1969年以降の設定と思われる。そして、彼女が続けて、マイケル・ラフェール (Michael Rafiel) が連

捕された 10 年前には「すでに死刑は廃止されていた——〔彼が死刑にならなかったのは〕彼の年齢が若かったからかもしれない」（108 頁）と述べているのは、この物語の設定が 1970 年前後で、死刑の適用が限定された 1957 年から 10 年近く経っていることを意味するのだろう。

『鏡は横にひび割れて』から家をシェアしているチェリー・ベイカー夫妻が再登場する。『カリブ海の秘密』の故ジェイソン・ラフェール (Jason Rafiel) からの遺言と手紙が届き、エスター・ウォルターズ (再婚してアンダーソン (Anderson) に姓が変わっている) が再登場し、ジョアン・プレスコット (Joan Prescott) と手紙のやり取りをする。ウエスト夫妻、サー・ヘンリー⁹⁾、『書斎の死体』、『パートラム・ホテルにて』への言及がある。

2. ミス・マープルの年齢

クリステイの『自伝』 (*An Autobiography*, 1977 年) によると、短編「火曜クラブ」に初めて登場したミス・マープルは「誕生したときに 65 歳から 70 歳だった」(436 頁) というので、1930 年前後に 70 代であり、執筆順で言うと最後の作品となる『復讐の女神』が書かれた 1970 年代には軽く 100 歳を越え、場合によっては 110 歳に近い可能性もあることが分かる。しかし、確かに作品が進むにつれてミス・マープルが老化していく様子がうかがえるものの、他方で、登場回数が増えていくにしたがってミス・マープルがどこことなく若々しくなっていくのもまた事実で、彼女の年齢は矛盾に満ちた設定になっている。そこで、再度いくつかの作品を取り上げ、ミス・マープルの年齢設定をうかがわせる箇所を考察してみよう。

2.1. 作品に暗示された年齢

2.1.1. 1920 年代末

(1) 「クリスマスの悲劇」 (“A Christmas Tragedy”, 1930 年 1 月)

短編集『13の謎』に収められた短編「クリスマスの悲劇」はミス・マーブルがバントリー夫妻の屋敷で語った事件である。ミス・マーブルによると、「その事件が起こったのはもうずいぶん昔のこと」（165頁）で、元スコットランドヤード警視総監のサー・ヘンリーも「それは私が警察で働いていたときよりも前の事件のようだ。私はその事件について聞いた覚えがない」（184頁）と述べている。引退しているサー・ヘンリーの現役時代よりも前に起こっているということは、その事件は相当昔の出来事と考えられる。しかし、ミス・マーブルは殺されてしまったサンダーズ夫人（Gladys Sanders）を救うことができなかったことを振り返り、自らを責めるとき、「でも、〔私があのかのとき何か忠告したとしても〕年老いた女性が出す軽々しい結論などに誰が耳を傾けてくれたというのでしょうか」（185頁、強調は執筆者によるもの）と述べている。「もうずいぶん昔」に起こった事件当時、「年老いていた」というのだから、ミス・マーブルは物語の現在である1930年前後ですでにかなりの老齢に設定されていることになる。ただし、事件当時、ミス・マーブルは2階建てのトラム電車に乗った際、1階が込んでいたので、リューマチに悩んではいたものの、2階に上がる若さがあったとも書かれている。彼女は登場当時から年齢不詳である。

(2) 「バンガロー事件」（“The Affair at the Bungalow”、1930年5月）

短編集『13の謎』の最後の話となる「バンガロー事件」には、ミス・マーブルがバントリー夫妻の屋敷を出たのは夜中の1時を回ってからであったことが記されている。その際、ロイド医師がエスコート役を買って出て、二人でセント・メアリ・ミード村に帰って行く。この短編では明記されていないが、『書斎の死体』によると、バントリー夫妻のカントリーハウス、ゴシントン・ホールはセント・メアリ・ミード村から1.25マイルから1.5マイル離れているので、夜中の1時に歩いて帰るはずはなく、おそらく、『書斎の死体』でバントリー夫人がミス・マーブルを屋敷に呼ぶ際に自分の車（と運転手）を出したのと同様、このときもバントリー家の車、あるいは

タクシーで帰宅したと思われるが、それでもこうした設定から、登場時、ミス・マーブルは年配者ではあっても、夜中の1時近くまで引き留めておくのが非常識であると思われるほど老齡ではなかったようである。

2.1.2. 1940年代初頭

出版は1976年だが、執筆は1940年ごろ（第二次世界大戦中）であり、設定も1940年前後と思われる『スリーピング・マダー』では、ミス・マーブルは物語の最後に、ヒロインを助けるために階段を駆け上がる体力があるので、杖を突いて歩いている『予告殺人』に比べ、格段若い。また、1957年出版の『パディントン発4時50分』以降、ミス・マーブルは常にヘイドック医師に庭いじりを禁じられているが、この作品ではまだ庭いじりをしていて、それをヘイドック医師がとがめていないので、その点でも彼女にはまだ若さが感じられる。

2.1.3. 1940年代末

1948年が舞台の『予告殺人』でミス・マーブルはリユーマチが悪化し、外出時に滞在先のハーモン牧師 (Julian Harmon) の杖を借りている描写があり、初登場したころから確実に年齢が上がっている。ただし、『予告殺人』の数年後の設定になっている短編「教会で死んだ男」では、ハーモン牧師がロンドンでミス・マーブルに会ってきた妻バンチに、ミス・マーブルの「体力が衰えたりしていなかったか」(26頁)と問いかけると、バンチは苦笑いしながら「全然」(26頁)と答えている。

2.1.4. 1950年代

(1) 『魔術の殺人』

ミス・マーブルは、少女時代、イタリアのフローレンスの寄宿学校でアメリカ人のルース・ヴァン・ライドック (Ruth Van Rydock、旧姓マーティ

ン (Martin) とキャリー・ルーズ・セロコールド (旧姓マーティン) 姉妹と交友を深める。ミス・マープルは同い年の姉のルースとはときどき会っているようだが、妹のキャリー・ルーズとは 25 年振りに再会することになる。キャリー・ルーズが学校を卒業した (あるいは結婚のために辞めた) 後、17 歳で最初の結婚をしているので、寄宿学校の卒業が 17 歳だとすると、ミス・マープルも寄宿学校に 17 歳ごろまでいたと考えられる。そのころから約 50 年経つというので、『魔術の殺人』でのミス・マープルは 67 歳前後となる。セクション「1.6.2.」で述べたように、この作品の舞台は出版年度と同じ 1952 年の設定となっているようなので、65 歳から 70 歳で初登場した 1930 年ごろから、ミス・マープルはまったく歳を取っていないことになる。ミス・マープルは自分は少し耳が遠くなったと述べてはいるものの、彼女の年齢は 60 代で止まっているのかもしれない¹⁰。

(2) 『パディントン発 4 時 50 分』

この物語の 2 年前に肺炎にかかったミス・マープルは、ヘイドック医師にかがんで庭仕事をするのを禁じられ、少し耳が遠くなり、あちこち歩く体力がなくなっている。イギリス版『パディントン発 4 時 50 分』には彼女の年齢への言及は存在しないが、アメリカ版『マギリカディ夫人が目撃したこと!』(What Mrs. McGillicuddy Saw!) では初めてミス・マープルの年齢への言及がある。

「...夜は軽い食事しかとらないようにしているんです——気を付けなければなりません。私は来年 90 歳になるんです。ええ、本当に」

「87 歳でしょう」とルーシーは言った。

「いいえ、90 歳です」(129 頁)

ミス・マープル自身が述べる 90 歳が正しいとしても、ルーシー・アイレスバロウ (Lucy Eyelesbarrow) が述べた年齢 87 歳が正しいとしても、『パディントン発 4 時 50 分』が出版年の 1957 年の設定だと仮定すると、短編

集『13の謎』で初登場した1930年ごろは60代前半ということになり、大体計算が合う。

2.1.5. 1960年代

(1) 『鏡は横にひび割れて』

ミス・マーブルの高齢化を示す描写があちこちに見られる。彼女はリューマチのせいで、かがんだり、土を掘ったり、植木をしりをするのを止められている。視力も低下し、あつらえたばかりの眼鏡もすぐに度が合わなくなり、編み物がしにくくなっている。編み物の際には虫眼鏡が必須で、編み物をして編み目を飛ばしてしまい、さらにはそのことに気が付かない。ミス・マーブルが高齢であること、そして気管支炎にかかり、体力が低下したことを理由に、ヘイドック医師は通いではなく、住み込みの世話人を置くことを命じる。また、ミス・マーブルは最近あまり出かけなくなっていて、お節介が焼けない。足元もおぼつかなくなっており、外出するときは杖を持ち、一人新興住宅地を散策中、石につまづき、転び、あざを作る。さらには少し耳が遠くなっている。

警部に昇進したクラドックはセント・メアリ・ミード村で殺人事件があったと聞いたとき、長い間会っていないミス・マーブルを思い出し、「今では相当な歳になっているはずだ。おそらくもう亡くなっているかもしれない」(79頁)と考えている。また、ゴシントン・ホールを買い取ったアメリカ人女優のマリーナ・グレッグ(Marina Gregg)の主治医ギルクリスト(Maurice Gilchrist)はミス・マーブルを見て、「100歳くらいに見える」(266頁)と述べている。ミス・マーブル自身も、昔自分に仕えてくれた(忠誠心あふれる)召使いは皆死んでしまったと嘆く。1930年ごろが設定の短編集『13の謎』で70歳前後、1950年代の『パディントン発4時50分』で90歳前後なら、1960年代の『鏡は横にひび割れて』におけるミス・マーブルはギルクリスト医師の予想通り、100歳近いはずである。

(2) 『カリブ海の秘密』

こじらせてしまった肺炎から回復したばかりで静養のために西インド諸島を訪れているミス・マーブルはすぐに疲れ、うたた寝をしたり、早く床に就いたりしている。ラフィール氏に「もう 100 歳近いのだから」(213 頁)と諭される場面がある。

(3) 『バートラム・ホテルにて』

「最近ほとんど〔セント・メアリ・ミード〕村を出なくなっている」(13 頁)ミス・マーブルはリューマチのため素早く歩けない。寝起きは指がこわばる。かつてのように長く歩き続ける歩行能力がない。かつて(おそらく第二次世界大戦中に)次男が近くの軍用飛行場に駐屯していたため、セント・メアリ・ミード村に住んでいたレディ・セリーナ・ヘイジー (Lady Selina Hazy) がミス・マーブルを見て、「もうとっくに死んでいるとばかり思っていた。100 歳に見える」(5 頁)と独り言を言っている。

他方、セクション「1.7.3.」で論じたように、ミス・マーブルがかつてバートラム・ホテルを訪問したのは 50 年から 60 年前の 1909 年のことなのだが、その当時彼女は 14 歳だったという記述がある。それで計算すると、『バートラム・ホテルにて』でのミス・マーブルは 65 歳前後から 75 歳前後となり、1930 年ごろが設定の短編集『13 の謎』では 30 代から 40 代だったことになる。そうすると、当初、多めに見積もっても 40 歳前後だったことになる女性をヴィクトリア朝の遺物のような年配者として扱っていたということになり、それではあまりに不自然であり、気の毒でもある。

(4) 『復讐の女神』

セクション「1.7.4.」で説明した通り、『カリブ海の秘密』の約 1 年半後の設定なので 1960 年代中葉の設定と見なす場合も、史実に照らし合わせ、1970 年前後と見なす場合も、1930 年ごろが設定の短編集『13 の謎』で 70

歳前後だったとしたら、この作品でのミス・マーブルは100歳を越え、110歳近くになっている。それに応じて、ミス・マーブルの老いも相当なものとして描写されている。テキストに登場する記述順に例示していくと、リューマチに悩んでいる。庭いじりを禁じられている。急な角度で曲がっている自宅の階段を降りると足元がおぼつかなくなり、『鏡は横にひび割れて』では一人で階段を「しっかりと降りて」（261頁）いたミス・マーブルは、本作品では『鏡は横にひび割れて』から家をシェアしているチェリーに助けてもらわねばならなくなっている。階段を上ると息切れがする。ミス・マーブル本人が「自分は1年後に生きているかは分からない」（23頁）と発言している。故ラフィール氏の手紙にもミス・マーブルは「少なくともあと1年は生きていだろう」（27頁）と綴られている。あまり動き回ってはいけないと医者に言われている。1年半ぶりに再会したエスター・ウォルターズがミス・マーブルは「とくに死んでいると思った」（42頁）と独り言を言っている。身体的にも精神的にも弱くなり、かつてのように油断なく注意を払うことができなくなっている。少し耳が遠くなり、視力もかつてほどよくなっている。

他方で、『書斎の死体』の事件が起こったのは「たった数年前」（73頁）であると書かれていたり、体力の描写では高齢を思わせるものの、具体的な年齢への言及に関しては、急激な若返りが起こったりしている。例えば、ロンドンの弁護士事務所のシュスター氏（Mr. Schuster）はミス・マーブルを見て「少なくとも70歳は下らない——おそらく80歳に近いだろう」（19頁）と言う。また、ミス・マーブルはコーチバスツアーに参加している70歳くらいの乗客を見て、「大体自分と同世代だろう」（60頁）と考えている。さらには、もしも彼女が100歳を越えているとしたら、自分の半分くらいの年齢のグリーン夫人（Lavinia Glynnne）を見て、「自分よりも何歳も若い。おそらく50歳くらいだろうか？」（94頁）とは言わないであろう。どうやら、ミス・マーブルはシリーズを通して常に70歳くらいの設定なのかもしれない¹¹。

2.2. 服装

次に服装の変化からミス・マーブルの年齢を考察してみる。登場時はミス・マーブルのヴィクトリア朝的な雰囲気強調されていた。特に、短編「溺死」を除き、最初の長編『牧師館の殺人』よりも前の1927年12月から1930年5月までに発表された短編をまとめた『13の謎』では、彼女の着ているものには古めかしさが目立つ。初登場の短編「火曜クラブ」でミス・マーブルは「ウエストの部分でキュッと締まった黒のプロケード生地ドレスを着て、メクリンの手編みのレースがボディスの前にカスケード状にあしらわれ、黒のレースのミトン手袋をはめ、黒のレースのフチなし帽をかぶって」(3頁)おり、短編「青いゼラニウム」では「黒いレースのミトン手袋をはめ、両肩に昔のレースのフィチュ〔ボディスの低いネックラインを隠すための大きな正方形のハンカチ〕をゆったりとかけ、真っ白な髪を別のレースでおおって」(102頁)おり、ヴィクトリア朝を想起させる「おばあちゃん」風の服装をしていた(ただし、前者は訪問客をもてなしているとは言え、自宅でくつろいでいるときであり、後者はカントリーハウスへのお呼ばれとは言え、バントリー夫妻の屋敷は近所であり、さらにはその日の朝に急に招待されたということもあって、セミ・フォーマルな装いをしているのかもしれない)。また、最初の長編『牧師館の殺人』でも「彼女は頭と両肩に目の細かいシェトランド・レースのショールをかけ、かなり年老いて、体が弱っているように見えた」(254頁)と描写されており、「お年寄り」のイメージが前面に押し出されていた。

ところが、1950年代以降、ミス・マーブルの服装はがらりと変わる。「透明な批評」に則って彼女を実在の人物であるかのようにとらえると、1950年代、ミス・マーブルは90代になっているはずなのに、颯爽とツイードのスーツを着て遠出をするようになる。『ポケットにライ麦を』では殺人事件のあった郊外の屋敷を訪問する際には「古いタイプのツイードのコートとスカートを身につけ、スカーフを何枚か巻き、鳥の羽の付いた小さなフェルトの帽子をかぶっている」(106頁)。彼女を実在の人物であるかのよ

うにとらえると、110歳近くになっているはずのミス・マーブルは、1971年出版の作品『復讐の女神』でロンドンの弁護士事務所を訪ねる際には「淡い色のツイードのスーツを着て、真珠の一連のネックレスと小さなベルベットのつばなしニット帽をかぶっている」(19頁)。こうした服装の変化は、彼女は作品が進むにつれて年齢が若くなっていっているように読者に感じさせる効果を持っている。

2.3. ヴィクトリア朝の人

クリステイの『自伝』にあるように、ミス・マーブルが登場時の1930年代に70歳前後だとすると、生まれは1860年代から70年代で、彼女はまさにヴィクトリア朝の人となる。それも「新しい女」が台頭した1890年代に20代から30代の青春時代を過ごしたことになる。そのためか、短編「クリスマスの悲劇」(167頁)や『書斎の死体』(207頁)でミス・マーブルは、自分はずいぶん甥のレイモンドに「ヴィクトリア朝的な考え方」をしているとからかわれていると述べている。また、出版は1970年代だが、執筆されたのは1940年代であった『スリーピング・マörder』でも、レイモンドによってミス・マーブルのヴィクトリア朝的な古めかしさが強調されている。

「きつとジェインおばさんのことが大好きになると思うよ」とレイモンドは言った。「おばさんは僕に言わせれば完璧な『過去の遺物』なんだ。骨の髄まで『ヴィクトリア朝』的なんだよね。おばさんの鏡台の脚にはどれも更紗が巻いてあるんだ。おばさんは村に住んでいて、その村ときたら、何にも起こらないような場所で、まさによんだ水たまりみたいなんだ」(23頁)

ポワロ作品の『ナイルに死す』(*Death on the Nile*, 1937年)には、ティム・アラートン(Tim Allerton)が母親のアラートン夫人(Mrs. Allerton)の「エドワード朝的な考え方」(32頁)を皮肉る場面がある。『ナイルに死す』

の設定が出版年の1937年ごろだと想定すると、そのとき50歳のアラートン夫人はヴィクトリア朝後期の1887年ごろに生まれたことになる。その彼女をエドワード朝(1901年から1910年)の人と言っているということは、人物の考え方や行動を時代で形容する際、生まれた時代を指すのではなく、青春時代を過ぎた時代を指していることが分かる。すると、レイモンドがおぼのミス・マーブルの「ヴィクトリア朝的な考え方」をからかっていることが指し示すのは、彼女が青春時代をヴィクトリア朝時代に過ぎたということと考えると差し支えないだろう。

ただし、1950年代後半が舞台の『パティントン発4時50分』には、「ミス・マーブルは『ジェントルマン』という言葉の口にする際、いつもその言葉に思い切りヴィクトリア朝的な趣を与えた——しかし、実際のところ、それは彼女の生まれ育った時代よりも前の時代の考え方のなごりなのだが」(180頁)と、ヴィクトリア朝時代は彼女の時代より前であり、彼女がエドワード朝の人間であるかのように語られている箇所も存在している。こうした例外はあるものの、ミス・マーブルを「ヴィクトリア朝的」と形容する点もまた、これまで論じてきたように、ミス・マーブルは初登場の短編集『13の謎』のころに70歳前後で、最後の作品『復讐の女神』のころには100歳を越えていたと思わせる描写である。

結び

こうした年齢の揺れが生じている理由はおそらく、そのときどきのクリスティから見た60代から70代のオールドミスがミス・マーブルに投影されているからであろう。初登場時のミス・マーブルのモデルになっているのは、クリスティの周囲にいた年配者たち、特に彼女の祖母とその友人たちであったとクリスティ自身が何回か述べている。短編集『13の謎』への1953年の「前書き」(1～2頁)では、

ミス・マーブルは私自身の祖母とどこことなく似ているところがある。

祖母も明るいピンク色のかわいらしい老嬢で、これ以上ないというくらい過保護に育てられ、ヴィクトリア朝独特の人生を送ったが、それにもかかわらず、いつも人間の邪悪さの奥底を知り尽くしているように思われた。(1頁)

と述べ、1977年出版の『自伝』には次のように記されている。

私はある雑誌に6編の続き物の短い物語を書き、6人の人物を選び、彼らに小さな村に週一回集まり、未解決の犯罪について説明させることにするのはどうだろうと思いました。私はまず、私の祖母の〔ロンドンの〕イーリング地区の親友たち——私が小さいころに滞在したたくさんさんの村で出会った年配の女性たち——にかなり似ているのではないかと思われるような年配の女性、ミス・ジェイン・マープルから始めました。ミス・マープルは決して私の祖母を写し取ったものではありませんでした。彼女は私の祖母よりもずっとやかましくて、いかにもオールドミスという感じですから。でも、ミス・マープルと私の祖母にはひとつ共通点がありました——明るい人だったのですが、いつもどんな人についても、どんなことについても最悪を予想し、その予想は大抵の場合、ほとんど恐ろしいと言っていいほどの正確さで正しかった点です。(435頁)

クレメント牧師の一人称で描かれているためによく分かるようになっているのだが、『牧師館の殺人』でのミス・マープルは周囲の人びとから詮索好きでお節介なお年寄りだと敬遠され、「評判が悪い (unpopular)」(180、235頁)。特に若い世代の代表のような20代のグリゼルダから、何度も「意地悪ばあさん (old cat)」と陰口を叩かれている。『書斎の死体』でバントリー夫人は、ミス・マープルが人びとに「誹謗中傷を言いふらす悪口屋 (scandalmonger)」(140頁)と呼ばれていると述べている。確かに当初のミス・マープルはゴシップを集めるために立ち聞きをしたり、バードウォッチングと称して人の家の様子や往来をのぞき見したりするような(されている側から見れば)嫌味な人物でもあった。これは若いころのクリステイから

見たおばあさん世代やおばさん世代の人びとの姿だったのだろう。

しかし年月が経つにつれ、クリスティは段々と当初のミス・マーブルの年齢に近づき、そしてそれを越えていく。それに応じるように、ミス・マーブルは段々と、人生経験を積んだ、いわば生き字引のような、困ったときに頼りになる存在、『パートラム・ホテルにて』のデイヴィ警部 (Chief-Inspector Fred Davy) のセリフを借りれば、「みんなの大おばさん (Everybody's universal great-aunt)」(131 頁) としての「愛されキャラ」へと変化していく。自らの年齢がいつしかミス・マーブルに近づき、そして追い越していくことで、クリスティはミス・マーブルを肯定的に描くようになっていったのだろう¹²。

ミス・マーブルの最後の作品である『復讐の女神』の最終頁が実に示唆に富んでいる。弁護士シュスター氏は、事件を解決し、弁護士事務所を去って行こうとしているミス・マーブルの様子を見て、昔ガーデンパーティで牧師と握手をしていた「若くて、幸せそうで、これから青春を謳歌しようとしている」「可愛らしい少女」(297 頁) を思い出す。『カーテン』(Curtain、1975 年) で殺人を犯し、自らの命を絶つボワロの最期とは何という違いであろうか。クリスティのミス・マーブルへの思いが読み取れる「最後／最期」ではないだろうか。今回は「透明な批評」を用いて、家族構成を含めた彼女の身元調査を行う予定である。

注

1 クリスティは『自伝』(An Autobiography、1977 年) でも 6 人が週一回会う設定であると述べている (435 頁)。ただし、彼女が 60 歳から 75 歳にかけて書いた『自伝』には記憶の混乱も見られ、「火曜クラブ」に集まる 6 名の情報が不正確である。ペサリックの名前はペティグリュー (Pettigrew) となっているうえ、短編集『13 の謎』の後半の 6 編で描かれるバントリー大佐夫妻 (Colonel Arthur Bantry and Dolly Bantry) の屋敷での晩餐会への招待客と取り違えているのか、メンバーの一人が元警察関係者ではなく、医者になっている (436 頁)。

2 しかし、ミス・マーブルは『予告殺人』(A Murder Is Announced、1950 年) でサー・ヘンリーに向かって「レイモンドのことを覚えていますか？」(96 頁) と問いかけているので、これは質問ではなく確認で、彼女の口癖なのかもしれない。ただ

し、『予告殺人』の方は、ミス・マーブルとサー・ヘンリーが最後に会ったのが『予告殺人』の20年近く前の『書斎の死体』なので、こう質問したとも考えられる。

3 ただし、最初の話である短編「青いゼラニウム」の出版時期と最後の話である短編「バンガロー事件」(“The Affair at the Bungalow”、1930年5月)の出版時期の間には約半年の開きがあるため、同じ晩の話であるにもかかわらず、最初と最後に季節が変わっているように読める。食堂が「ものすごく寒い」(102頁)という晩餐会開始時のバントリー夫人の嘆きは、短編「青いゼラニウム」が雑誌『ストーリー・テラー』(*The Story Teller*)のクリスマス号に掲載されたこともあって、バントリー夫妻の屋敷での晩餐会はクリスマス・シーズンに開催されたのではないかと想像させる。しかし、晩餐会終了後にミス・ヘリアが口にするセリフ、「[宝石盗難計画]は今年の秋、9月に実行に移すつもりだったんです」(224頁、強調は執筆者によるもの)は、年末の発言としては違和感があり、当初クリスマス・シーズンに開催されていたように思われた晩餐会は、短編「バンガロー事件」が発表された春先に終了したかのような印象を与えている。

4 ミス・ハートネルは、セクション「1.3.3.」で論じるように、1935年前後が舞台と考えられる短編「昔ながらの殺人事件」(“Tape-Measure Murder”、1942年2月、現在は短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』に収められている)で55歳と明記されているので、『牧師館の殺人』に初登場時は50歳前後と考えられる。

5 ジョアンは短編集『13の謎』のジョイス・レンプリエールと同一人物で、名前が変えられたのではないとも言われている。

6 長男デイヴィッドは『鏡は横にひび割れて』でエンジニアになったことが明らかになる。

7 運動の結果、1969年に死刑廃止となった。

8 現在用いられているペリカン・クロッシング(Pelican crossing)は1969年に導入された。

9 ブラバゾン牧師(Archdeacon Brabazon)が殺されたエリザベス・テンプル(Elizabeth Temple)について述べる際、「エリザベスだったら、私に頼んだかもしれない」(216頁)という仮定法過去完了を用いて語るのと同じように、ミス・テンプルもサー・ヘンリーについて述べる際、「ヘンリーなら言ったかもしれない」(168頁)という仮定法過去完了を使っているため、彼はもう亡くなっていると思われる。

10 様々な登場人物の過去の行動時の年齢や年号が詳しく記されているこの作品は、そのために却って辻褄が合わなくなっている。特にキャリア・ルイズが娘ミルドレッド(Mildred Strete)を出産した年齢に矛盾が生じている。

11 ただし、本作品でミス・マーブルの思考力が老化している点は否定できない。彼女は「私の記憶力はいい」(165頁)と自負しているが、実際のところ、彼女の記憶力は確実に低下している。特にミス・テンプルの発言を巡るミス・マーブルの証言は不正確なものが多い。ただし、おそらくこれはミス・マーブルの記憶力の低下を示す例として描かれているのではなく、この作品の出版年には80代になっていた作者クリステイの記憶力の低下が生んだ矛盾と見なした方が適切かもしれない。

12 『パートラム・ホテルにて』にはミス・マーブルがロンドンの百貨店アーミー・アンド・ネイヴィー・ストアを再訪し、この百貨店の常連客だったヘレンおばさん (Aunt Helen) との思い出を懐かしむ場面があるが、トンブソンの伝記は、クリスティが祖母たちに連れられてアーミー・アンド・ネイヴィー・ストアを訪れた思い出がここに反映されていると指摘している (33~34、500 頁)。クリスティは晩年、ミス・マーブルに祖母たちの姿ではなく、自分自身を投影していることがうかがえる。

引用文献

- Christie, Agatha. *At Bertram's Hotel*. 1965. London: HarperCollins, 2016.
- . *An Autobiography*. 1977. New York: HarperCollins, 2011.
- . *The Body in the Library*. 1942. London: HarperCollins, 2016.
- . *A Caribbean Mystery*. 1964. London: HarperCollins, 2016.
- . *Curtain: Poirot's Last Case*. 1975. London: HarperCollins, 2013.
- . *Death on the Nile*. 1937. New York: Berkley Books, 2004.
- . *4.50 from Paddington*. 1957. London: HarperCollins, 2016.
- . *The Mirror Crack'd from Side to Side*. 1962. London: HarperCollins, 2016.
- . *Miss Marple's Final Cases*. 1979. London: HarperCollins, 2016.
- . *The Moving Finger*. 1943. London: HarperCollins, 2016.
- . *The Murder at the Vicarage*. 1930. London: HarperCollins, 2016.
- . *A Murder Is Announced*. 1950. London: HarperCollins, 2016.
- . *The Mysterious Affair at Styles*. 1921. London: HarperCollins, 2013.
- . *Nemesis*. 1971. London: HarperCollins, 2016.
- . *A Pocket Full of Rye*. 1953. London: HarperCollins, 2016.
- . *Sleeping Murder*. 1976. London: HarperCollins, 2016.
- . *Taken at the Flood*. 1948. London: HarperCollins, 2015.
- . *They Do It With Mirrors*. 1952. London: HarperCollins, 2016.
- . *The Thirteen Problems*. 1932. London: HarperCollins, 2016.
- . *What Mrs. McGillicuddy Saw!* 1957. New York: Pocket Books, 1958.
- 廣野由美子 『批評理論入門——『フランケンシュタイン』解剖講義』(中央公論新社、2005 年)
- Nuttall, Anthony David. *A New Mimesis: Shakespeare and the Representation of Reality*. London: Methuen, 1983.
- Thompson, Laura. *Agatha Christie: A Mysterious Life*. 2007. London: Headline, 2020.
- Zembo, James. *The Detective Novels of Agatha Christie: A Reader's Guide*. Jefferson, NC: McFarland & Company, 2008.